

田寅彦全集

第十卷

寺田寅彦全集 第10巻 (全17巻)

1961年7月7日 第1刷発行 ©
1979年2月14日 第7刷発行

¥ 800

著 者 ^{てら}寺 ^だ田 ^{とら}寅 ^{ひこ}彦

発行者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発行所 株式会社 岩波書店

電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

印刷・精興社 製本・青木製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

随

筆

十

目次

自由画稿	七
箱根熱海バス紀行	七一
随筆難	七八
映画雑感(Ⅳ)	八五
B教授の死	一〇九
災難雑考	一一八
映画雑感(Ⅴ)	一三二
海水浴	一三五
糸車	一四二

映画と生理	一四九
映画雑感(VI)	一五四
静岡地震被害見学記	一六〇
高原	一六八
小浅間	一七三
震災日記より	一八〇
映画雑感(VII)	一九〇
雨の上高地	一九三
日本人の自然観	二〇〇
小爆発二件	二三一
三斜晶系	二三八
うずもれた漱石伝記資料	二五一

自由画稿

はしがき

これからしばらく続けて筆を執ろうとする随筆断片の一集団に前もって総括的な題をつけようとする存外むづかしい。書いてゆくうちに何を書くことになるかもわからないのに、もし初めに下手な題をつけておくとかとあとになってその題に気兼ねして書きたいことが自在に書けなくなるという恐れがある。それだから、いつもは、題などはつけずに書きたいことをおしまひまで書いてしまつて、なんべんも読み返して手を入れた上で、いよいよ最後に題をきめて冒頭に書き入れ

ることにしているのである。しかし今度は同じ題で数か月続けようとするのだから事情が少しちがつて来る。もっとも、有りふれた「無題」とか「断片」とかいう種類のものにすればいちばん無難ではあるが、それなんだからあまり卑怯なひきょうような気がする。いろいろ考へているとき座右の楽譜の巻頭にあるサン・サーンの *Rondo Capriccioso* * という文字が目についた。こういう題もいいかと思う。しかし、ずっと前に同じような断片群にターナーの画帖がじょうから借用した *Liber Studio*、*Libro* という名前をつけたことがあったが、それを文壇の某大家が日刊新聞の文芸時評で紹介してくれたついでに「こんなラテン語の名前などつけるものの気が知れない」と言つて非難されたことがあるので、今度もこうした名前は慎むほうがよいであろうと思う。いろいろ考へた末に結局平凡な、表題のとおりの名前を選むことになつてしまつたわけである。全くむづかし

ものである。

この集の内容は例によって主として身辺まじ瑣事じの記録や追憶やそれに関する瑣末さまつの感想である。こういうものを書く場合に何かひと言ぐらい言い訳のようなことをかく人も多いようである。考え方によればそれも必要かもしれない。しかし、いかなる個人でもその身辺にはいやでも時代の背景が控えている。それで一個人の身辺瑣事の記録には筆者の意識いかにかわらず必ず時代世相の反映がなければならぬ。また筆者の愚痴な感想の中にも不可避免的にその時代の流行思想のにおいがただよっていなければならない。そういうわけであるから現代の読者にはあまりに平凡な尋常茶飯じんじょうさはん事でも、半世紀後の好事家こうずかには意外な掘り出し物の種を蔵しているかもしれない。明治時代の「風俗画報」*がわれわれに無限の資料を与え感興をそそのめるのもそのためであろう。ただし、そういう役に立つためには記

録の忠実さと感想の誠実さがなければならないであろう。

これが私の平生こうした断片的随筆を書く場合のおもなる動機であり申し訳である。人にものを教えたり強しいたりする気ははじめからないつもりである。

集中には科学知識を取り扱ったものも自然にしばしば出て来るかもしれない。しかしそれも決して科学知識の普及などということを目的として書くのではない。ただ自分でほんとうにおもしろいと感じたことの覚え書きか、さもないければ譬喩ひよか説明のために便利な道具として使うための借りものに過ぎない。しかし、そうかと言ってその結果がいくぶんか科学知識普及に役に立つことになってもそれはさしつかえはないであろうと思っている。

ついでながら、断片的な通俗科学的読み物は排斥すべきものだというような事を新聞紙上で論じた人が近

ごろあつたようであるが、あれは少し偏頗な僻論であると私には思われた。どんな瑣末な科学的知識でも、その背後には必ずいろいろな既知の方則が普遍的な背景として控えており、またその上に数限りもない未知の問題の胚芽が必ず含まれているのである。それで一見いわゆるはなはだしく末梢的な知識の煩瑣な解説でも、その書き方とまたそれを読む人の読み方によっては、その末梢的問題を包含する科学の大部門の概観が読者の眼界の地平線におぼろげにでもわき上がることは可能でありまたしばしば実現する事実である。読者の頭脳次第では、かなりつまらぬ科学記事からでもいろいろな重大問題の暗示を感知し発見し摂取し発展させることもしばしばあるのである。一方ではまた浅薄な概括的論述を羅列した通俗科学的読み物がはなはだしく読者をあやまるという場合もしばしばあるであろう。それで、ただ一概に断片的な通俗科学はいかな

る場合でも排斥すべきものであるかのような感を読者にいだかせるような所説に対しては、少なくとも若干の付加修正を必要とするであろうと思われた。この機会についてながら付記しておく次第である。

一 腹の立つ元旦

正月元旦というとき、ときげんが悪くなって苦い顔をして家族一同にも暗い思いをさせる老人があつた。それは温厚篤実をもつて聞こえた人で世間ではだれ一人非難するものないほどまじめな親切な老人であつて、そうして朝晩に一度ずつ神棚の前に礼拝し、はるかに皇城の空を伏しおがまないと気の済まない人であつた。それが年の始めのいちばんだいじな元旦の朝となると、きまつてきげんが悪くなって、どうかすると煙草盆の灰吹きを煙管の雁首で、いつもよりは耳だつて強くだたくこともしばしばあつた。

その老人のむすこにはその理由がどうしてもわからなかったのであったが、それから二三十年たってその老人もなくなって後に、そのむすこが自分の家庭をもつようになって、そうして生活もやや安定して来たころのある年の正月元旦がたんの朝清らかな心持ちで起床した瞬間からなんとなく腹の立つような事がいろいろ目についた。きれいに片付いているべき床の間が取り散らされていたり、玄関の障子が破けていたり、女中が台所で何か陶器を取り落としたような音を立てたり、平生なら別になんでもないことが、その元旦に限ってひどく気になり、不愉快になり、やがて腹立たしく思われて来るのであった。その一方ではまた、きょうは元旦だから腹を立てたりしてはいけないという抑制的心理が働いて来る、そうするとかえってそれを押し倒すような勢いで腹立たしさが腹の底から持ち上がって来るのであった。その瞬間にこの男は突然に、実に突然

になくなった父のことを思い出してびっくりした。そうして、その瞬間にはじめて今までどうしてもわからなかった、昔の父の元旦の心持ちを理解することができたのである。

それからまた数年たって後のことである。このむすこのむすこがある年の正月に何かちょっとしたことになるべきようになっていなかったと言つてひどくその母や女中に対しておこっているのをその父親が発見してひどくびっくりし、そうしてまた非常に恐ろしくなったのだそうである。

こういう話を聞いてひどく感心したことがある。つまらない笑い話のようで実はかなり深刻な人間心理の一面を暴露していると思う。こんなのも何かの小説の種にはならないものかと思う。

それはとにかく、正月をめだたいという意味が子供の時分から私にはよくわからなかったが、年を取って

もやはりまだ充分にはわからない。少なくとも自分の場合では正月というとかくめでたからぬことが重畳して発生するように思われるのである。のみならず平日ならそれほどにも感じないような些細なめでたからぬことが、正月であるがために特にふめでたに感ぜられる。これはおそろくだれでも同様に感じることであらう。たとえば小さい子供がおおぜいあるような家ではちょうど大晦日や元日などによくだれかが風邪をひいて熱を出したりする。元旦だからというのでつい医者と呼ばなかったばかりに病気が悪化するといったような場合もありうるであらう。

高等学校時代のある年の元旦に二三の同窓といっしょに諸先生の家へ年始回りをしていたとき、ある先生の門前まで来ると連れの一人が立ち止まって妙な顔をすると思ったら突然仰向けにそりかえって門松に倒れかかった。そうしてそれなりに地面に寝てしまつて口

から泡を吹き出した。驚いて先生を呼び出して病人をかつぎ込んでから顔へ水をぶっかけたり大騒ぎをした。幸いにまもなく正気づきはしたが、とにかくこれがちやうど元旦であつたために特に大きな不祥事になつてしまつたのである。

正月元旦は年に一度だから幸いである。もしこれが一年に三度も四度もあつたらたいへんであらうと思われるが、しかしいっそのことこれが一年に十二回とか五十回とかあるようになればまたかえって楽になるかもしれない。そう思つてみると、一年に一回ずつ特別な日を設けて、それを理由などかまわずともかくにもめでたい日ときめてしまつて強いてめでたがり、そうしてそのたびに発生するいろいろな迷惑をいっそう痛切に受難することにもなかなか深い意義があるような気がしてくる。

正月をめदैとして祝うことを始めて発明した人

があつたとしたら、その人はやはりなかなかえらい人であつたろうと思われるのである。

二 こじきの体験

子供の時分、たぶん七八歳ぐらいのころかと思うがとにかくあまり自慢にならぬこじきの体験をしたことがある。

そのころ郷里高知では正月の十四日の晩に子供らが「粥釣り」と称して近所の家を回って米やあずきや切り餅をもらって歩いて、それで翌朝十五日の福の粥を作るといふ古い習慣が行なわれていた。素面ではさすがにぐあいが悪いと見えてみんな道化た仮面をかぶって行くことになつていたので、その時期が来ると市中の荒物屋やおもちゃ屋にはおかめ、ひょっとこ、桃太郎、さる、きつねといったようないろいろの仮面を売つていた。泥色をした浅草紙を型にたたきつけ布海苔

で堅めた表面へ胡粉を塗り絵の具をつけた至って粗末な仮面である。それを買って来て焼け火箸で両方の目玉のまん中に穴を明ける。その時に妙な焦げ臭いにおいがする。それから面の両側の穴に元結いの切れを通して面ひもにするのである。面をかぶるとこの焦げ臭いにおいがいっそうひどい、そうして自分のはき出す呼吸で面の内側が湿つて来ると魚膠のにおいや浅草紙のにおいやらといっしょになつて実に胸の悪い臭気をかもし出すのであつた。五十年後の今日でもありありこの臭気を思い出すことができるのである。

四五人、五六人という群れになつて北山おろしの木枯らしに吹かれながら軒並みをたずねて玄関をおとずれ、口々にわざと妙な作り声をして「カイツツトーセ」という言葉を繰り返す。「粥釣りをさせてください」という意味の方言なのである。すると家々ではかねて玄関かその次の間に用意してある糯米やうるちやあず

きや切り餅^{もち}やを少量ずつめいめいの持っている袋に入れてやる。みんなありがとうともなんとも言わずにそれをもらって次の家へと回って行くのである。

平生は行ったこともない敷居の高い家の玄関をでもかまわず正面からおとずれて、それとなく家居のさまを見るという一種の好奇心のようなものがこれらの小さいこじきたちの興味の中心であったように見える。

大概の家では女中らはもちろん奥さんや娘さんまでのぞきに出て来て、道化た面をかぶった異風な小こじきの狂態に笑いこける。そこには一種のなんとなく窳^{よう}窳^{よう}たる雰^{ふん}囲^い氣^きがあったことを当時は自覚しなかったに相違ないが、かなりに鮮明なその記憶を今日分析してみればじめて発見するのである。粥^{かゆ}釣^つりが子供ばかりでなくむしろおとなによって行なわれたかと思わるる昔ではこうした雰^{ふん}囲^い氣^きがあるいはかなりに重要な意義をもっていたのではないかと想像されるのである。

自分の宅^{うち}へ来る粥^{かゆ}釣^つりを内側から見物した場合のほうが多かったように思う。粥^{かゆ}釣^つりに来るおおぜいの中でも勇敢なのは堂々と先頭に立ってやって来るが、氣の弱いのは先頭の背後に隠れるようにして袋をさし出すのもある。しかしなにしろおもに近所の人たちであるから、たとえ女の着物を着たり、羽織をさかさまに着たりしていてもおおよその見当がつく場合が多い。

粥^{かゆ}釣^つりを迎える家に勇猛な女中でもいると少し怪しいと思われるようなのをいきなりつかまえて面を引きはごうとして大騒ぎになるようなこともあったような気がする。

こじきを三日すると忘れられないというが、自分にもこのこじきの体験は忘れられないものである。このこじき根性が抜けないおかげで今日をどうやらこうやら飢えず凍えず暮らして行かれるのかもしれないのである。

こんな年中行事は郷里でも、もうとうの昔に無くな
ってしまつて、若い人たちにはそんな事があつたとい
うことさえ知られていないかもしれない。

三 冬夜の田園詩

これも子供の時分の話である。冬になるとよく北の
山に山火事があつて、夜になるとそれが美しくまた物
恐ろしい童話詩的な^{ふんいき}雰囲気^{ふんいき}を田園のやみにみなぎらせ
るのであつた。

友だちと連れ立って夜ふけた田んぼ道でも歩いてい
るときだれの口からともなく「キーターヤーマー、ヤ
ーケール、シシーガデッヨ」と歌うと他のものがこれ
に和する。終わりの「出うよ」を早口に歌ってしまう
と何かに追われでもしたようにみんないっせいに駆け
出すのであつた。そういうときの不思議な気持ちを今
でもありあり思い出すことができる。

自分が物心づくころからすでもうかなりのおばあ
さんであつて、そうして自分の青年時代に八十余歳で
なくなるまでやはり同じようなおばあさんのままで^お嬰^か
鑠^{しやく}としていたB家の^お伯母^ばは、冬の夜長に孫たちの集ま
っている燈下で大きなめがねをかけて夜なべ仕事をし
ながらいろいろの話をして聞かせた。その中でも実に
不思議な詩趣を子供心に印銘させた話は次のようなも
のであつた。

冬のやみ夜に山中のたぬきどもが集まって舞踊会の
ようなことをやる。そのときに足踏みならしてたぬき
の歌う歌の文句が、「こいさ(今宵^{こよい}の方言)お月夜で、お
山踏み(たぶん山見^{やまけん}分の役人のことらしい)も来まい
ぞ」というので、そのあとに、なんとかなんとかで「ド
ンドコシヨ」というはやしがつくのである。それを伯
母が節おもしろく「コーイーサー、(休止)、オーツキ
ヨーデー、(休止)、オーヤマ、フリーミモ、コーマイゾ